第6版　序

学生諸君、取りて読め！

ローマ帝国時代の神学者アウグスティヌスは、「取りて読め」という声を聴き、近くにあった聖書を読んで回心したといわれます。人と人がそうであるように、人と本の出会いも神様のプレゼントのようなご縁に導かれる事があります。

この冊子（赤本）は、教養教育センターの先生方が学生のみなさんに読んでもらいたい本をまとめたものです。みなさんは、ご縁があってこの赤本を手にされました。ぜひ最後まで読んでいただけると嬉しいです。ただ、教科書のように端から端まで全部読む必要はないので、気が向かないところは飛ばしながらでも、気楽に読んでいただければ大丈夫です。そして、もし興味を感じていただけた本がありましたら、本学図書館の入口を入ってすぐ右側にある、赤本で紹介されている本をそろえた教養教育推薦図書コーナーで、その本を探して読んでみましょう。

赤本の第3版の序に書かれていますが、よい本は、みなさんに助言を与えてくれたり、励ましてくれる友達のようなものです。みなさんが「取りて読め」の声に導かれて、よい友達を見つけていただけることを切に願います。

2023年1月　　福原　忠

第5版　序

赤本『若き人々のために』第4版を出してから3年経ちました。その間、本学は工学部の学科拡充により学生数が増加し、また看護学部が新設され新入生が今年入ってきました。教養教育は2学部の教育に関わる教養教育センターとなり、教員の数も20名余りから30名近くに増えました。このようなタイミングで第5版を出すこととなりました。

最近はますます情報化が進み、次世代通信の5G、人工知能によるディープラーニング（深層学習）、量子コンピュータによる飛躍的な計算時間の短縮等多くのニュースが世間を賑わせています。また、21世紀も20年近く経ち、環境等のグローバルな問題を協調的に解決する努力よりも20世紀に予想した以上に後ろ向きあるいは非協調的な雰囲気を感じる時代ともなっており、よりいっそう先が見通せないように感じます。

このような時代背景の中で、様々な行為の価値を決めるのは、傾向を読み取る人工知能ではなく人間自身であると思います。価値判断はもっぱら人生の経験から影響を受けると思いますが、読書は様々な人生の疑似体験となるでしょうから、本との出会いはきっと皆さんの人生をより豊かにしてくれる糧となることでしょう。

2019年10月　　石森　勇次

第4版　序

赤本『若き人々のために』は、教養教育の教員が学生の皆さんに出来るだけ多くの本を読んでいただくために書き記した紹介冊子です。今回2009年に初版を出してから8年程過ぎ、第4版を出すこととなりました。教員の顔ぶれも、全体の教員数は初版21名から第4版20名でほとんど変わりませんが、教員の移動等で9名は初版とは異なっています。

学生の皆さんにとって、読書の目的は様々ではないかと思います。宿題のレポート作成や資格修得・試験の準備等のように、必要に迫られて専門書を見ることもあるでしょう。また、日本語や外国語の運用能力をつけるために読書をすることもあるでしょう。しかし、この冊子で紹介している本の多くは、実益のためというより皆さんの人生がより豊かになるようにという思いを込めて紹介されています。

人生には様々な出会いがあり、その人の生き方や考えに大きな影響を与えることがあります。その中で、本との出会いも少なからず影響があるのではないかと思います。その善し悪しは単純に測ることの出来ない人生の綾ではありますが、出会いのきっかけとして本冊子が少しでも仲人としての役割を果たすことができれば幸いに思います。

2016年11月　　石森　勇次

第3版　序

期末試験のときだけ賑わっている、というのが我が県立大学図書館の入館状況のようです。たしかにテスト勉強に図書館を利用するのは、参考書を探すためにも、そして試験を戦うための同志を見つけるためにも有効なやり方でしょう。しかしこの期間だけ利用していると、図書館のオアシス的役割、毎日の生活の慌しさから癒してくれるという効果を知らないままでいることになります。普段図書館や読書から縁遠い人は、たとえ本を手にしなくてもよいから、しばらく館内で時間を過ごしてみる、例えば奥のソファーで休んでみるとよいでしょう。本の背表紙に見つめられながらぼーっとしている経験を重ねると、本の方でもいつか親近感をもって誘いかけてくれるはずです。

日々の生活から一歩離れた空間にいる、という感覚は読書の環境としてのみならず、本の内容理解のためにも大事な条件です。また読書すること自体が否応なしに皆さんを今そこにいる状態から、別の世界に連れて行ってくれます。なるほど友人たちと一緒に遊んだり、ワイワイ騒いだりするのが最良の息抜きだと言う人も珍しくないでしょう。しかし一人になって歓談を振り返ったとき、仲間たちと大事な点で考えが一致していると確信を持って言えますか。人生観、社会観になると、真の友人と言えども、意見の一致を見ることは少ないでしょう。そもそもこれらをテーマに話をすることがどれほどあるでしょうか。また、一人で楽しむ静かな趣味を持っていることも日々のストレス解消のために大変好ましいことですが、多くの場合それによって人生や社会に対する不安や疑問は少しも解消されないことは言うまでもありません。

皆さんの側に少しの忍耐と根気があれば、皆さんが抱えている学生生活上、人生上、あるいは社会上の疑問や希望に対して助言を与えてくれたり、励ま

してくれる本が必ず見つかります。皆さんの仲間たちが、あえて口にしないようなテーマや欲求に対しても、有効な助言や示唆を与えてくれる本が必ず見つかるでしょう。現実世界の中で、皆さんに共感や同意を示してくれる人がいなければいないほど、あるいは学内に皆さんと付き合う人がいなければ、それだけますます本の語る言葉は皆さんの心の琴線に触れてくるはずです。読書の喜びと力はそもそも孤独な人、または孤独を確保した人のためにあります。

赤本『若き人々のために』は、教養教育の教員が皆さんの年代の人たちが読んだら、人生上、学生生活上の励みになるのではないかと考えて、それぞれ数冊ずつ選んで解説をつけたものです。この中には教員自身の若い頃の愛読書もあれば、最近出版されたものの中から皆さん向けに選ばれたものもあります。本との出会いは人との出会いと同じで、ある人にとっては馴染めるものも、別の人にとっては違和感があったり、ある人にとっては共感者になってくれるものが、別の人にとっては批判者になったりします。いずれにしても相性が合わなければ読書途中でも放り捨て、他の本に向かった方が良いでしょう。最適な本、最良の助言者としての本に出会うためには、ある程度出会いの回数を重ねなければいけません。例えばここに挙げられた本を手始めに、できるだけ多くの本に接してください。読者が若いとそれだけ多くの本が誘ってくれます。たくさんの誘いに乗って、最良の伴侶を見つけてください。

2012年8月　　中川　佳英

初版・第2版　序

――より深く、より豊かな人生（いのち）を生きるために――

かつて、若い人々が読むことが望ましいとされていた本がありました。そして、テレビや映画といった映像文化、インターネットの発達による多様な情報メディアの存在する現代においても、「読書」が若い人々に求められていることはいうまでもありません。

経済的・物質的な豊かさ、多様化した価値観の中にあって、私たちが今どの地点に立っているかを見極め、どのような目的に向かって進むべきかを考え、主体的に行動していく力を持つことが求められています。生涯にわたって、様々な形で提供される膨大な情報の中から自ら必要なものを見つけ、獲得し、統合していく知的な能力、謂わば「人間力」を培うことが必要となってきます。そして、時代がどのように変わろうとも、そういう力の涵養に、本を読み、考えることが大きく関わってきたということは事実なのです。

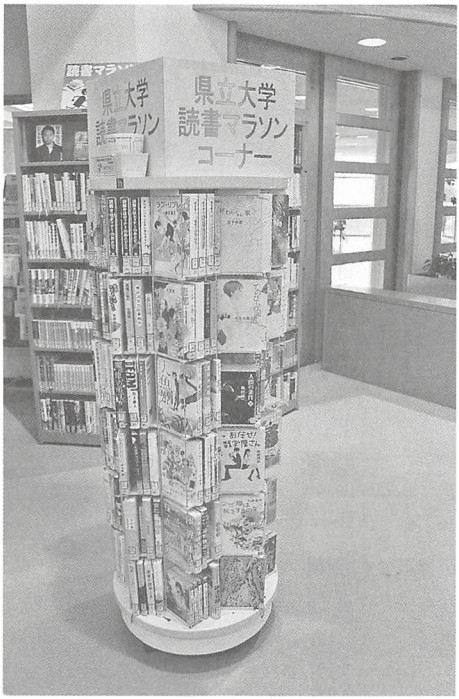
今回、私たち教養教育の教員が中心となって、若い皆さん方（VIRGINIBUS PUERISQUE）のために、学生時代にこそ読んでほしい本の目録を作成しました。それは大きく分けて、皆さんが「技術者」として生きていく時に力となってくれる本と、「人間（ひと）」としてより深く、より豊かに生きていく本とに分けられます。

人はたった一つの人生しか生きることはできません。しかし、本を読むことで、多くの人生を擬似的に体験することができるのです。21世紀の今、日本で生活していながら、日本のみならずアジアや欧米の歴史上の疾風怒濤の時代を生き、冒険に心を踊らせ、激しく苦しい恋を知り、多くの科学者たちの発見の喜びを追体験し、また逆に、先人たちが経験した絶望的な戦争や飢餓・貧困・憎悪の悲惨さをも知ることができるのです。

もちろん、読書によって得られた体験が本当に血となり肉となるのは、皆

さんがこれからの人生の一瞬一瞬を切実に生きることによってであることはいうまでもありません。しかし、読書を通じて自己を確立するとともに、学ぶことやよりよく生きることへの主体的な態度を身につけるのみならず、生涯にわたって新しい知識を獲得し、統合していく能力を涵養し、異なる国、世代、性、宗教、言語、価値観、生き方など、自分とは違うものに対する理解を深め、異質なものを尊重し、共感し、共存していく能力を身につけることができるのではないでしょうか。

より深く、より豊かな人生を生きられますことを念じています。

2009年1月　　中　哲裕

（名誉教授・元図書館長）